

## 私が出会った、キリストの信仰を伝える人々

### — フランスと日本の間に生きて —

湯沢慎太郎（パリ日本人カトリックセンター信徒代表）

私は十二歳の時に、画家である父と、母、姉と一緒にパリに来て、今年で滞仏二十九年になります。リセ（中高校）卒業後、パリ大学で学びました（理論物理専攻・素粒子理論）。フランスと日本の間に生きてきた年月において、最も決定的であったことは、十四歳の時、パリ日本人カトリックセンター（当時の担当司祭はパリ・ミッションのデュノワイエ神父）との出会いです。私は当時、ドストエフスキーの「カラマゾフの兄弟」のイワン「永遠の調和のために無垢な子供の涙が必要ならば、そんな最高の調和なんぞ全面的に拒否する！」<sup>1</sup>という言葉に共鳴するような少年でした。しかし神父様をはじめ、センターの人々は、このような若者の根本的な問い掛けを大事にして、真剣に答え、辛抱強く教えてくれました。

キリストの教えを良く示す例として、ファリサイ派の人と徴税人のたとえ話（ルカ十八章 9-14）についての説教があります。ファリサイ派の人の間違いを神父様は次のように指摘しました。

「もし真面目に道徳的に生きることによって人間が救われるならば、どうしてキリストは十字架に付けられて死ななくてはならなかったのか！」

私が厳しく教えられたことは、自分の真実に立つこと、つまり自分の悲慘に立つことのみが、救いの道なのだということでした。私にとって、教会の教えは難しいものでしたが、長い年月をかけて、少しずつ、十字架上の死にいたるまで罪深い人間を愛した神の子イエス・キリストの、条理を超えた愛を理解するようになりました。そして二十九歳で洗礼を授かりました。

このようなキリスト教の影響を、フランス社会のあり方において見る事が出来ます。フランスでは、現在および過去の様々な痛ましい出来事—ナチス・ドイツとの協力、アルジェリア戦争、植民地主義、奴隷制度、人種差別、生命倫理—などについて、専門家のみならず、一般市民がいかなるタブーも恐れずに、オープンに議論しています。そこでは教会の責任ということも取り上げられますし、また教会も積極的に社会における議論に参加しています。もちろん未だに激しい対立があり、コンセンサスにいたるまでには長い年月を必要とする問題が多くあります。しかし人々が様々なタブー、恐れを乗り越えて、自分の真実に立って、自由に発言しているのは、キリスト教の希望のメッセージが、社会全体に深く根付いていることから来ていると思います。そしてこれはキリスト教徒であるなしにかかわらないのです。キリストの十字架上の死と復活は、私たち一人一人の苦しみも、救いの歴史上の出来事として理解されるのだという確かな希望を与えたのです。

デュノワイエ神父様は四年前に引退されました。その前年に、日本から来た妻と私の結婚式を挙げてくださいました。センターでは現在、ドミニコ会の Sr マリー・エレヌ・トレボーを中心とした信徒のチームが信仰を伝える仕事を続けています。一方、私はパリカトリック学院の神学部学士課程で神学を学んでいます。そして妻の同意を得て、終身助祭となる予定です。二千年来、綿々と伝えられてきたキリストの信仰を、私もまた伝えていくことが出来るという希望と喜びのなかに生きています。「カラマゾフの兄弟」の終わりに、アリョーシャは子供たちにこう告げています。

「人生を恐れてはいけません！何かしら正しい良いことをすれば、人生は実に素晴らしいのです！」<sup>2</sup>

---

<sup>1</sup> 新潮社「カラマゾフの兄弟」原卓也訳による

<sup>2</sup> 同書